

今年度の発掘調査では

このような遺構・遺物を確認しています。

遺構：竪穴建物跡 16 棟、溝跡 7 条、墓跡 35 基、土坑 220 基

遺物：平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、中世の陶製合子蓋・古銭（宋銭）・五輪塔・宝篋印塔、風炉（茶道具）、骨

（平成 29 年 6 月現在）

ここがポイント！

ポイント1 平安時代の竪穴建物群の発見

竪穴建物跡は、塔鏡形合子が出土した建物跡とほぼ同時代のものです。その配置をみると、北八幡川に沿うように東西に細長く並んでおり、川に挟まれた幅狭い微高地上に集落が営まれていたことがわかります。

竪穴建物は、短期間に幾度も建て替えられていたことがわかりました。建物を廃棄する際には、竪穴を一度平らに埋め戻しており、新たな建物はその上に建てられていました。塔鏡形合子は、その埋め戻された土の中から出土しており、竪穴を埋める最中に廃棄されたと考えられます。現在、その埋め戻すことになった要因を埋土の状況などから詳細に検討しており、それによって塔鏡形合子が廃棄された理由の一つに迫ることができると考えています。

ポイント2 L字に折れ曲がる大溝

昨年度の調査で南北にのびる大溝（SD01）を確認しましたが、今年度の調査においてそれが調査区南端部で東方向へL字状に折れ曲がることわかりました。また大溝は中世（鎌倉時代以降）のもの想定していますが、その中からは陶磁器のような什器はほとんど出土しておらず、墓や供養塔として建立された大量の五輪塔が廃棄されていました。つまり、本年度調査している箇所はその区画の中にあたり、寺院やその墓地を区画した溝である可能性が考えられます。

ポイント3 中・近世の墓跡

中世から近世（鎌倉時代から江戸時代）にかけての墓跡が見つかりました。火葬と土葬があり、棺の痕跡が認められたものもありました。墓跡はおもに大溝の内側にありましたが、近世のものは大溝の上や外側からも見つかっており、大溝が埋まった後も墓域として利用されていたようです。

発掘調査の豆知識

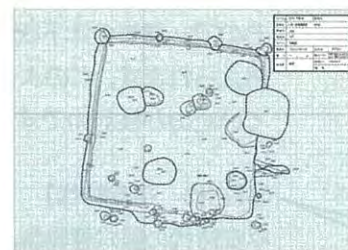
一発掘現場で探してみよう

測量杭



発掘した遺構は、詳細な図面をとって記録します。その際に正確な場所を記録するために、その基準として測量杭を用います。これによ

ってミリ単位で日本のどこから発掘されたものか記録することができます。



遺構平面図

ポイントベース（測量明示盤）



「コノエ」などとも呼んでいます。調査では、真上から見た平面図だけでなく、真横から見た断面図など様々な角度で図面を作成します。その際に、どの位置で測量を行ったのかを地面にうって示しています。

土嚢（どろう）



発掘調査では土嚢を多く使います。発掘された建物跡などの遺構は非常にもろいため、毎日作業終了後にシートをかけて養生します。その際の重しとして使ったり、土砂の流れ込みを防いだり、多くの場面で使われます。

小島・柳原遺跡群

現地説明会資料



とうまりがたごうす
塔鏡形合子

（平成 28 年度出土）

2017 年 7 月 8 日

（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

小島・柳原遺跡群は、長野市東部、北長池から大町にかけて広がる遺跡群で、これまでもいくつかの地点で発掘調査が行われてきました。なかでも柳原公民館のある一帯（水内坐一元神社遺跡）では弥生時代の環濠を有する大規模な集落跡が確認されています。

長野県埋蔵文化財センターでは、一般国道 18 号長野東バイパス改築関連事業に伴い、平成 28 年度から小島・柳原遺跡群の発掘調査を行っています。

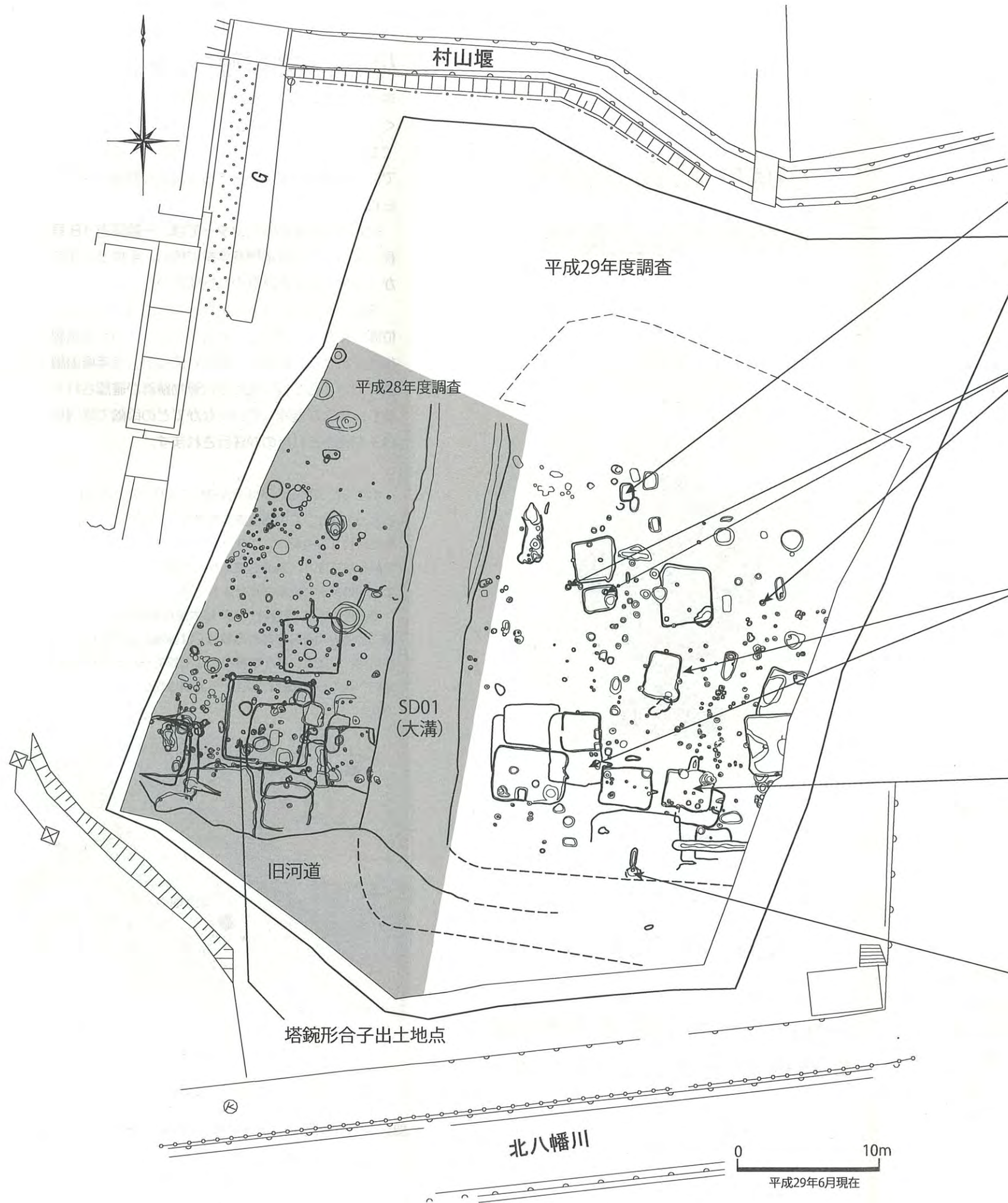
今回の発掘調査地点は小島・柳原遺跡群の南端に位置しており、昨年度「塔鏡形合子」という金属製仏具が出土し、非常に注目されました。今年度の調査においてもそれに続く竪穴建物跡群が確認されており、集落が展開していくなかでどの段階で塔鏡形合子が廃棄されたのか注目されます。

出土した塔鏡形合子は奈良時代に作られたと考えられるものですが、この地に集落が営まれるようになったのは平安時代（9世紀末）になってからです。集落は短い期間で終わりますが、幾度も建物を建て替えており、そのなかで塔鏡形合子は廃棄されたようです。

その後、中世 鎌倉時代以降に大溝が掘削され、その内側（今回の調査区にあたる部分）は墓域となりました。江戸時代に入ると、墓や供養塔として建てられた五輪塔は大溝内へ捨てられるなどしながら墓域は縮小していったようです。



調査地点位置図（国土地理院発行 1:25,000 地形図を一部改変作成）



①【中・近世】

中・近世の墓跡。穴の中から釘が多く出てきており、木棺^{もっかん}を用いたと考えられます。



②【近世 江戸時代か】

ほったてはしら^{ほったてはしら}のあと掘立柱建物跡。柱穴の底に石塔の五輪塔の部材（地輪・火輪）が礎石状に置かれていました。かつては墓石や供養塔であった五輪塔を転用したもので、建物の沈下を防いだものと考えられます。どのような建物が建っていたのか検討中です。



③【古代 平安時代】

平安時代の竪穴建物跡。建物を廃棄する際に埋め戻し、さらにその途中で火を焚いていました。その後、整地し、その上にまた竪穴建物跡を建てたようです。



埋められた土の中から大量の炭が出てきています。

④【古代 平安時代】

平安時代の竪穴建物跡。カマドは北側に作るものと東側に作るものがあります。いずれのカマドも残りは良くなく、建物を廃棄する際に大きく壊していたようです。



⑤【中世 室町時代】

ないじ^{ないじ}とき内耳土器が多量に出土した穴が見つかりました。穴の内側は激しく焼けており、カマドの煙道^{えんどう}のような筒状の掘り込みが付いています。内耳土器を焼いた穴にしては小さく、何のための施設か検討中です。



0 10m
平成29年6月現在